No.26　Sep, 2021

# 多摩細胞診研究会

## コロナ禍の2020年

Society of Cytopathology
TAMA

目次


| | | | |
|---|---|---|---|
| ★ | はじめに | | 1 |
| ★ | 帝京大学医学部溝口病院へのご案内 | 高橋美紀子 | 1-4 |
| ★ | コロナ禍の第61回日本臨床細胞学会総会（春期大会）WEB開催 | 佐藤之俊 | 5-6 |
| ★ | コロナの中で | 小松彦太郎 | 7-8 |
| ★ | 新型コロナ禍の2020年 | 三浦弘之 | 9 |
| ★ | コロナ禍で | 涌井清隆 | 10 |
| ★ | “所沢”INコロナ禍 | 元村栄喜 | 11-12 |
| ★ | コロナ禍の2020年を振り返って | 松本　純 | 13-14 |
| ★ | 2020年コロナ禍での臨床検査 | 町田知久 | 15-16 |
| ★ | 【新型コロナウイルス感染症拡大から１年あまり・・・】 | 笹井伸哉 | 17 |
| ★ | この1年を振り返って | 藤山淳三 | 18 |
| ★ | 新型コロナウイルス感染蔓延に対する臨床検査技師教育現場の対応 | 廣井禎之 | 19-20 |
| ★ | 東京病院WEB勉強会の様子 | | 20・22 |
| ★ | 2020年を振り返って | 我妻美由紀 | 21-22 |
| ★ | COVID-19の影響・・・ | 澁木康雄 | 23 |
| ★ | コロナ禍の2020年 | 布村眞季 | 24 |
| ★ | コロナ禍の2020年 | 蛇澤　晶 | 25-26 |
| ★ | 多摩細胞診の歴史と編集後記とご挨拶と | 若槻よしえ | 26 |
| ☆彡 | 多摩細胞診はじまりの物語 | | 27 |
| ☆彡 | 多摩細胞診の歴史と会報振り返り | | 28 |
| ☆彡 | 編集後記 | | （敬称略） |


No.26　Oct,　2021

## はじめに

コロナ禍の2020年、多摩細胞診研究会のみなさまは、どのように過ごされましたか？　年二回の学術集会は中止、細胞学会も東京病院勉強会もWEB開催.
はてさて、2020年の会報は一体どうしたらよいのか、ということとなり、**“コロナ禍の2020年”**というタイトルで会員の皆様の様子をできる限りお伝えすることとなりました。
みなさまの一年を、ちょっとだけ覗いてみましょう。

## 帝京大学医学部溝口病院へのご案内

帝京大学医学部附属溝口病院　病理診断科
高橋　美紀子

多摩細胞診研究会会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか？昨年の3月に当院、帝京大学医学部附属溝口病院で研究会を開催する予定が、新型コロナ感染で中止になった以降、ほぼ1年となりますが、これほど長引くとは思いませんでした。当院でもコロナ患者を少ないですが受け入れる体制を整えてあり、臨床サイドは神経をとがらせている状況です。しかし、幸運にも私たち病理診断科、臨床病理部には関係者を含め、コロナ感染者・濃厚接触者も出ず、ほぼ変わりなく日常業務をこなしています。かえって、検体数や病理解剖数が増え、これまで以上に忙しい日常です。

今回は、昨年開催予定だった研究会が中止となり、新しくなった溝口病院を見ていただけなかったので、紙面（今時アナログ）で案内しようかと思います。

溝口病院の最寄駅は田園都市線高津駅の目の前、あるいは南武線の武蔵溝ノ口駅、田園都市線の溝の口駅から徒歩10分弱です。高津駅からは信号を隔ててすぐ目の前。小雨程度であれば傘ささずに行き来できます。

←高津駅

高津駅側玄関からの景色

高津駅側玄関



病院は外来・管理棟と入院等の2棟からなり、検査部門は外来・管理棟にまとめられています。外来・管理棟はもともとIT関連会社の建物だったといわれており、三角形の建物で、広い窓が特徴です。1階ロビーは広々とし、グランドピアノが設置され、毎日、決まった時間に自動演奏が流れるのと、週3回は事務の女性が実際に朝週数十分、実際に演奏しています。また、年末のクリスマスシーズンにはロビーコンサートを実施し、患者や周辺の住民の方々へ素晴らしい音楽を提供しています（昨年末は当然中止でした）。

また、この病院の入り口わきには、“珈琲の詩”という名の喫茶店があり、こちらにもグランドピアノがおいてあり、一日中クラッシック音楽が流れています。カレーとサンドイッチが売りで、コーヒーも大変おいしいです。クラッシック好きの方はいかがですか？音楽関連の本が置いてあって、いつまでも過ごせる雰囲気です。

1階のロビーを抜けて、エレベーターあるいはエスカレーターで４Ｆまで上り、セキュリティードアをくぐると、臨床検査部・病理検査部が連なっています。入り口前にはストレッチャー用・業務用の大型エレベーターがあり、現在はコロナ感染疑いの患者の搬送に使用する可能性があり使用を控えるように言われていますが、移動には便利な場所です。また、臨床病理部を通り過ぎるとリフレッシュコーナー（三角形の建物なので各階の両端に設置）というテーブル・椅子の用意してある空間があり、職員が昼休みに食事や休憩しているのを見かけます。

クラッシックとコーヒーの喫茶店です。

リフレッシュコーナーでいろいろな人が休憩しています

病理検査部は比較的広く、皆様おなじみの機器が並んでいます。ディスカッション顕微鏡前には大型のモニターが2台設置されており、カンファも十分に対応できるようになっています。三角形の建物で病理検査部は西側に面しているので、大きな窓のおかげで大変明るく、冬は暖かくていいのですが、夏はとっても暑く大変です。しかし、はめ殺しの窓で防音も十分で、比較的快適な環境で仕事できています。また、建物の高津駅側の窓からは高津駅のホームと線路内がばっちり見え、特に３階は高架と同じ高さなので、目の前に電車を見ることができ、飽きることなく眺めていられます。最上階7階からは多摩川花火大会での大型の花火を見ることができ、毎年、希望者を募って花火観賞していたのですが、昨年は花火大会が中止となり、残念でした。

入口を見た風景。それなりに広いです。

モニターは大小２台設置され、カンファに役立っています。



入院棟の１階には霊安室に隣接して解剖室が作られました。以前の旧い病院では、皆様にお見せできないほど狭く、暗い解剖室で、更衣室も男女の別なく、女性はトイレに使っていた空間で着替えていたほどです。それが、男女別の更衣室にシャワールーム付きとなり、大変有難いです（これが普通なんでしょうけど）。病理解剖も400病床の割に、年間24-26例と多いほうではないかと思います。

現在、病理医は川本教授、私（高橋）、阿曽助教の常勤3名と水口先生（臨床検査科科長で病理非常勤）、江口先生（非常勤）、技師は山田さん、湯澤さん、福田さん、吉野さん、山本さん（現在産休中）、本橋君（山本さん産休中の短期のみ）で日常を運営しています。加えて、電子顕微鏡担当の海野さん、フォトセンターの高橋さんが部局のメンバーです。建物が新しくなったためか、臨床の評判が良くなった(？)からかは不明ですが、順調に検体数が増え、組織診で5000検体をこえ、細胞診は5500検体強となっています。皆様の施設でも同じかと思いますが、免疫組織化学や遺伝子検体の取り扱いが増え、検体数では説明できない忙しさがあり、慌ただしく過ごす毎日です。さらに、川本教授が3月で定年となります。しばらくは延長していただけるようですが（その後の詳細はいずれ）、来年度は精神的にも頑張らねばと思っています。

新型コロナ禍がおさまり、懇親会を含めた多摩細胞診研究会が再開となれば、当院も開催会場として手を挙げますので、開催の際は病院自体もぜひ楽しんでください。それでは、いずれ再会できるときまで、皆様、ご健康には十分に注意してお過ごしください。

## コロナ禍の第61回日本臨床細胞学会総会（春期大会）WEB開催

第61回日本臨床細胞学会総会（春期大会）　会長　佐藤之俊
（北里大学医学部呼吸器外科学　主任教授）

2019年末に中国武漢に端を発した新型コロナウィルス感染の拡大のため、第61回日本臨床細胞学会総会（春期大会）はWEB開催となりました。本来でしたら2020年6月5, 6, 7日（金、土、日）の3日間にわたってパシフィコ横浜で開催する予定でしたが、未曽有の事態のため会場開催はしないという苦渋の決断をしました。そして、多摩細胞診研究会の皆様には2020年4月20日頃にWEB開催のご案内をメールで差し上げた次第です。

WEB開催は2020年6月20日から7月19日までの1か月間でした。多摩細胞診研究会の皆様にも多大なご協力を頂き、何とか無事終了することができました。この場を借りて心から御礼申し上げます。どうもありがとうございました。最終的な参加登録者は7,215名、総ログイン数は58,371回、総ページ閲覧数は234,078ページ、そして総コメント数は934件でした。過去に比較する学術集会がないためこれらのデータは今後の参考として生かせていただきたいと思います。

さて、学会のWEB開催という全く経験のない事態でしたので、会場にて対面で議論する意義のある会とは異なります。この状況で、一体どのくらいの参加者数が期待できるのか全く見当がつきませんでした。その上、WEB開催の準備を急遽始めたため、どのくらいの費用がかかるかも想像できませんでした。そこで、一人でも多くの参加登録を頂くために思いつく限りの工夫を実行しました。まずは、Twitterを行って学術集会の準備状況、プログラム内容などの情報発信に努めました。Twitterなどというのは初めての経験でしたので、見様見真似での発信となり、お恥ずかしい限りです。そのためか、フォロアーは全く増えませんでした。学術集会のホームページでは、できる限り新たな情報をアップしました。このアナウンスはそれなりに効果があったと思います。また、そこに動画を適宜アップしました。当初は自撮り画像をアップしたのですが、満足のいく画質ではなかったので、開会や閉会の挨拶はしっかりとプロに撮影してもらいました。予想通り、仕上がりは自撮りとは比べ物にならないハイクオリティでした。

その他にも、スライドカンファレンスの事前回答者で全問正解の方には抽選で景品が当たる企画や、神奈川県臨床細胞学会の役員にご依頼し、優秀演題を選考し表彰する企画を実行しました。優秀演題については、とくに若い方々へのエールの気持ちを込めて選考していただきました。

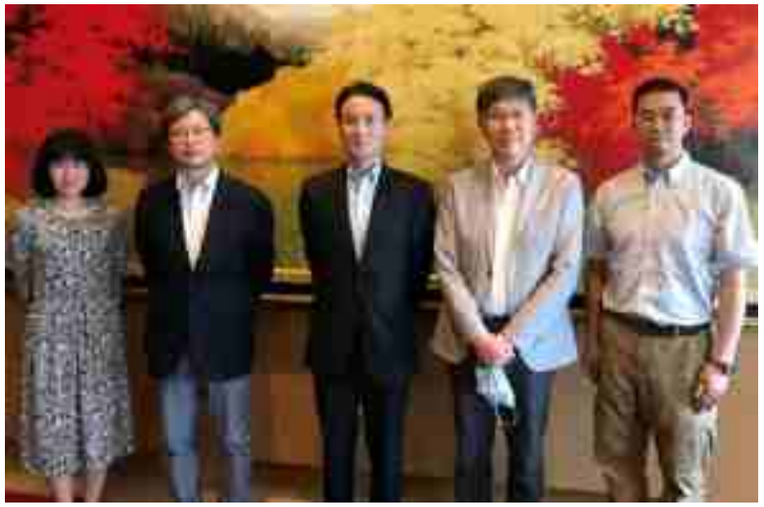
さて、今回の経験から、現行システムの限界を感じたのは、WEB開催での双方向性議論が難しいということでした。各演題にはディスカッション機能を付加し、質問やコメントを入力でききるようにしましたが、情報を自ら取りに行かないと自分の発表に質問やコメントがあることをキャッチできないという問題点が浮き彫りになりました。このように会場でのリアルタイムの議論の重要性を改めて認識しました。そこで急遽、参加型企画を立ち上げ、多摩細胞診研究会はじめ全国の会員にご協力を頂きました。モニター越しの議論ですが、背景の音声が聞こえたり、司会者（澁木さん）のアドリブもあったりして、臨場感のある印象的な場でした。

特別講演は撮影クルーによる事前収録を行いました。画質、音声共に一般の演題とは異なっているのがお分かりだったかと思います。立命館大学古気候学研究所の中川毅先生（私の呼吸器外科の恩師である中川健　がん研名誉院長先生のご子息）には「暴れる気候と暴れない気候—人類は「予測不可能」な時代をどう生き延びたか—」、神戸大学大学院医学研究科　生理学・細胞生物学講座の南康博先生（私の同級生）には「癌細胞の孤立的および集団的浸潤：偶然と必然」、そして、がん研究所病理の石川雄一先生（これまた私の同級生）には「人は何故がんになるのか —発がんと山極勝三郎の業績」の各ご講演をいただきました。いずれも、オンデマンドで何回でも視聴できたのは我ながらよかったなあと思います。実際、中川先生の講演は4回も視聴してしまいました。

もう一つの目玉は、細胞診に関する研究会・勉強会の活動発表ポスター発表の場を設けました。活動数はそう多くはありませんでしたが、全国から「多摩細胞診研究会」のような会の情報が共有でき、情報発信の場となったことと思います。ご協力ありがとうございました。

何とか学会は無事終了しましたが、打ち上げ会を開催することもままならず、達成感に乏しい開催だったなあというのが正直な感想です。

最後に、多摩細胞診研究会の皆様の益々のご健康とご発展をお祈りいたします。そして、コロナに打ち勝ち、今まで以上に活発な研究会活動（飲み会も）ができるとこと願ってやみません。



## コロナの中で

小松彦太郎（多摩細胞診研究会名誉会長　ケア東久留米施設長）

多摩細胞診研究会の皆さんお元気ですか。

この一年コロナに振り回され、未だ収束が見えない状況が続いています。私は、現在老人保健施設の施設長をしています。昨年2月から面会制限を開始し、３密を避ける対策の毎日です。職員の教育にも努め、持ち込ませない対策に苦慮しています。職員に感染者が出ましたが幸いクラスターにならずに済みました。無症状感染者による感染拡大の防止が最大の課題だと考えています。飛沫感染防止はもちろんですが手を介しての感染を注意しています。また、いつも自分が感染しているかもしれないという意識をもち他人に感染させないように努力することも大切だと考えています。医療崩壊だけは何としても防ぎたいものです。一日も早いワクチンの接種と適切な治療法の確立を望んでいるところです。

趣味の写真、探鳥、ゴルフもほとんどできませんでした。写真、探鳥のツア-はみな中止になってしまい仕方がなく近場を探しました。思いがけなく素晴らしいところを発見することもありました。しかし、長野県、東北、北海道などに早く行きたいものです。また、写真展の多くが中止になり、写真を評価してもらう機会も少なくなってしまいました。ゴルフは、多摩細胞診研究会、清瀬会のゴルフは中止になり、細々と河川敷で続けています。

閉じこもっていられない性格ですので少々嫌気をさしています。早く自由に出かけたいものです。

多摩細胞診研究会の学術集会も50回を前に足踏み状態です。私は、53年前愛知県瀬戸市から清瀬の東京病院に出てきました。細胞診は、愛知がんセンターの沢田先生（後に千葉がんセンター、私の指導医）、名古屋市立大学の柴田先生の指導で始めました。

東京病院では、肺がんの細胞診を担当し、1978年に細胞診指導医になりました。東京病院の上野さん、昭和病院の森さん、所沢医療センターの田中さんらと1972年に勉強会を始めました。1991年に昭和病院と合同の勉強会を始め、その後1994年に多摩細胞診研究会の学術集会を開始し、ほぼ毎年2回開催されています。また、細胞診検査士の育成、会員相互の細胞診断の向上などにも大きく寄与してきたと思っています。私の後、蛇澤先生、布村先生に引き継いで頂き今日に至っています。細胞診を愛する熱心な会員の皆さんに支えられ、こんなに長くこの研究会が続けられていることに感謝しています。最近は、細胞学会の中枢で活躍されている研究会の仲間も増えています。この研究会がこれからもコロナに負けずに発展継続していくことを期待しています。

添付の写真は、コロナ以前の皇居の夜桜です。いいですね。　　2021年4月

## 新型コロナ禍の2020年　公立阿伎留医療センター　呼吸器外科　三浦　弘之

2020年11月、ついに当院の看護師が新型コロナに感染したことが判明し、激震が走りました。これまで近隣の病院が新型コロナ感染症クラスターを形成する中、患者を一手に引き受けてきたのに・・・よりによって私の病棟です。いままで外科学会からの手術の自粛要請により、手術を行うことができませんでした。呼吸機能検査も禁止。そもそも肺がん検診が延期されているので、肺癌患者が見つからない状態でした。呼吸器内科医師を新型コロナ対応に専念させるため、私は呼吸器内科の患者も引き受け、裏方に回っていました。ようやく肺がん検診が開始され、手術予定が組めるようになった矢先でした。

全患者・全職員にPCR検査を行ったところ、同じ病棟の患者3人も感染していることが判明しました。疫学調査の結果、すでに退院している患者が感染源だったようです。そこからが大変でした。すでに一つの病棟をコロナ専用にしているにもかかわらず、患者を移動させることなく、私の病棟を閉鎖。師長をはじめとして職員は2週間の自宅待機。救急外来閉鎖。新規入院中止。予定手術延期。内科医師は自宅待機。私も本来なら自宅待機なのですが、誰が患者診るんだ！ってことになって、仕事しながらの待機。外勤は禁止。なんとそこに臨床細胞学会開催が重なったのです。発表があったにもかかわらず、学会参加禁止。

PCR結果が判明する前でしたが、私の肺癌手術前日の患者が、PCR陽性者と同室でした。緊急性を要すると判断されて手術を決行しましたが、術後1週間以内で退院できたものを、2週間の隔離を命じられました。『しょうがないよ先生、こんな時期なんだから』と言っていただきました。良い患者でよかった。私も診察の際は個人用保護具のフル装備で毎回着脱。看護師さん達は他病棟からの応援で賄っていたので、呼吸器外科の術後管理なんか知らない人たちがほとんどでした。手取り足取り教えながら、肝心なことは自分でやるしかありませんでした。その甲斐あって、新型コロナ陽性者は5人で制御されました。新型コロナ対策チームの快挙です。

12月に入り、他病棟を借りての手術再開となりました。当然、そこの看護師は呼吸器外科の術後管理を知らない。指示を仰ぐための電話はひっきりなし。様子を聞くより診に行ったほうが早いやってことで、遅くまで病院にたむろしてました。その病棟に下血で緊急入院した患者が、なんと新型コロナ陽性だったのです。再度、全患者・全職員のPCR検査、さらにその4日後、日曜日でしたが全員PCR再検査。この間に退院予定の患者は唾液を持参していただくよう要請されました。感染予防のため、北風が吹きすさぶ外のテントで新型コロナ対策チームの看護師が検体を受け取っていました。



『車で来た患者さんが、唾液の入った容器を投げつけていったよ。』『大変だね。』『三浦先生の患者さんだよ。』『・・・』コロナ陽性者はいませんでした。

手術後、飲みにも行けない、旅行もできない。皆イライラして、人間関係もギクシャクしてくる。しかし、ここで羽目を外して感染すると、病院に多大な迷惑がかかるだけでなく、病院の存続にかかわる損失を生むことになります。感染力の強い変異株も出現しました。病理は診療の要です。皆さん、気を抜かずに頑張りましょう！コロナはただの風邪ではありません。

## コロナ禍で　公立阿伎留医療センター診療部臨床検査科　涌井清隆

多摩細胞診の皆様、お元気でお過ごしでしょうか？昨年初頭より世界的流行となっております新型コロナウィルス感染症(COVID-19)により、様々な催し物が中止または延期を余儀なくされ、未だ、終息の目途がたっておりません。私たち細胞病理に携わっております医療人において身近な病理学会、細胞学会そして多摩細胞診研究会も例外なく、中止やWeb開催、ハイブリット開催となってしまっているのが現状です。当院においては、昨年11月に看護師2名が患者よりコロナに感染し、新規外来や入院、救急外来、急を要しない手術をお断りする事態に陥ったため、ここ秋川流域の基幹病院としての役割を果たすことができず、病院は多大な損害を被りました。そこで院長、病院幹部の命を受け、【Akiru ONE TEAM】と題して、①院内において職員を含めて感染者を出さないこと、②入退院時における患者のPCR検査の徹底等をはかり、それ以降、職員や入院患者に感染者は出ておりません。今まで職員一斉PCR検査を3回ほど実施しましたが、それでも誰一人感染者はいませんでした。PCR検査は外注していますが、3月中には院内でPCR機器を導入し実施することになっています。（これからPCRのトレーニングに勤しみますが、汗）今現在は、発熱外来や新規入院は抗原検査と新しく導入したアボット社のNEAR法（核酸増幅法）を併用して迅速に感染者を発見し、封じ込めて院内感染を防止しています。院内でPCR検査ができるようになれば、抗原検査は廃止してより感度が良いNEAR法を簡易検査として用いることになります。抗原検査は早くても35分もかかっていましたが、NEAR法は13分で結果が判ります。（抗原、NEAR法は陽性であればもっと結果が早い）当院の病理は、診断科として独立した科ではなく、検査科に属しておりますので、コロナ検査は検査科の技師全員が交代で実施しており、私は病理の仕事をしながらの対応ですので大変忙しくしております。

普段の検査数はもちろんですが、当直時もその日に施行したコロナ検査数をLINE worksを利用して事務方に報告し、それを東京都に伝えることによって正しい新規感染者数や実施検査数の把握に尽力しています。コロナ禍で病理の仕事も変わりました。それはギムザ染色を暫くのあいだ中止したことです。ギムザ染色は風乾固定させますのでこれは危ないと判断しました。喀痰はあらかじめアルコール固定液が入っている保存痰法に変更して対応しております。多摩細胞診は昨年３月に帝京大学溝口病院で開催予定でしたが中止となり、その次は当院で行う予定でおりますが、未だ予定がたたないのが現状です。ワクチン接種も始まりましたが、1回目接種も３週間後の2回目接種時にワクチンは届くのでしょうか？近い将来、多摩細胞診研究会が開催されますことを願ってやみませんが、それまでは皆様におかれましてはお元気でお過ごしになられますよう心よりお祈り申し上げます。晴れて、研究会でお会い出来ますことを楽しみにしております。

令和3年（2021年）3月

# “所沢” INコロナ禍

**所沢市市民医療センター　元村栄喜**

多摩細胞診の皆様、毎朝忘れずに検温されていますか？今回はコロナ禍における我々二人(元村・小竹)の働きぶりと、少しだけ所沢をPRさせて頂きます。所沢市市民医療センターは内科・小児科・健診、４９床の小さな市立病院です。細胞診標本は子宮頸がん検診の頸部スメアと肺がん検診の喀痰細胞診が主体で細胞診業務以外に腹部超音波、血液検査、心電図、細菌迅速検査等々色々な検査を掛け持ちしています。2020年4月7日の「緊急事態宣言」以来、当施設でも新型コロナウイルス感染症対応の為、様々な激変がありました。・・・4/8健診業務全停止、4/16発熱外来開始(施設を一部改造)、6/3医師会PCRセンター開、・・・2021.2/8アフターコロナ患者の入院受け入れ等々、まだまだ大波にもまれている状態です。その中でも二人はPCRセンターや発熱外来の誘導係を引き受けたり、発熱患者の抗原検査やPCR検査にも一生懸命取り組んでいます。趣味としては二人共アウトドア好きなので冬にはスノーボードに出かけます。初フルマラソンでは一緒に完走する事が出来ました。個人的には家庭菜園も楽しんでいます。

一方、地元の所沢では2020.9月商業施設“Grand Emio”、 11月角川武蔵野ミュージアムがフルオープンしました。また“猫バス＆トトロ”ファンにとってはたまらない『となりのトトロ』のモニュメントも出来てコロナ禍でも元気に発展中です。

今、日本でもやっとコロナワクチン接種が始まりました。一日でも早くコロナが終息する事を願いアマビエの写真を掲載させて頂きました。**疫病退散！**　いつまでも未熟な二人ですが今後も宜しくお願い致します。

## コロナ禍の2020年を振り返って

公立福生病院　臨床検査技術科　松本　純

コロナ禍の発生から瞬く間に1年が経過し、多摩細胞診研究会の中止を始め臨床細胞学会総会がオンラインでの開催に変更されたりと、自施設以外の細胞検査士の方にお会いする機会が激減してしまいましたが、皆様お元気でしょうか？

今回、昨年を振り返りつつ近況報告をと言うことで、拙文ではありますがお付き合いいただければ幸いです。

昨年は日常生活も含め多くの変化がありましたが、1月に初めてCOVID-19のニュースをみた際は、正直自分の生活や病院での業務に直接の影響はないだろうと甘い見積もりを立てておりました。しかし事態は悪化の一途をたどり、私の勤務する公立福生病院においても業務体制の変更を余儀なくされました。

最初にCOVID-19による影響を感じたのは（ここからの話は私個人の目線での話となりますが）国内でもCOVID-19の流行し始めた昨年の２月頃で、総合受付や検査科受付にビニールによる急造の飛沫防止窓が設置され病院玄関での病院職員による来院者の検温作業が始まった時でした。この時期は、病院以外に商業施設や個人でも非接触型の体温計の需要が高まっており、製品を見つけるのに苦労していたとの話を聞きました。

検温が始まっても私個人は短期的な業務だろうと思っていましたが、約9カ月程度続くものとなり、鏡検時間が目に見えて減ってしまいました。現在は、AI検温モニターが設置され来院者の案内は地域のシルバー人材派遣の方が担当しており、業務の圧迫は軽減されました。

話は変わりますが、臨床検査技師の皆様は日本臨床検査技師会が数年前から実施していた「検体採取等に関する厚生労働省指定講習会」には参加されましたでしょうか？

私自身は受講後、検体採取をする機会があるのだろうかと思っていましたが、検温作業やPPEを装着しての業務がある程度定着した9月頃、近隣の病院でもクラスター発生の情報が入るようになり、当院でもついにクラスターが発生していまいました。

この時、病院内の全職員と全患者のPCR検査を実施する事となり、医師の負担軽減の為、臨床検査技師が検体採取をする事となり、現在も一部患者の検体採取など行っております。

直近の報告として、今回のコロナ禍において世間でのPCR検査は多くの注目を集めていますが、当院の検査科では行っておらず、PCR検査院内実施の必要性を感じ私も立ち上げ担当として、9月頃より導入の準備を開始し、本年1月より稼働を開始しました。しかし、初めて行う検査でもあり右往左往していますが、一番の問題は消耗品であるピペットチップや検体チューブ、検体採取用のブラシまでもが世界的な品薄となっており、常時在庫を気にしながらの検査を余儀なくされています。この先この状態がいつまで続くかわかりませんが、病院医療を円滑に行うため、あの手この手を考えねばと思っているところです。

ここまで、病理とはあまり関係ない話をしてまいりましたが、コロナ禍発生より現在に至るまで、その影響は外来の縮小や、手術の中止などにより病理にも少なからず影響を及ぼしており、昨年の組織、細胞診の検査数は前年比の70％程度と激減してしまうなど、マイナスな方向に働いてしまいました。

しかし、一年を通し暗い話題ばかりでもなく、奇跡的に実施された細胞検査士認定試験において、当検査室からの受験者が合格するなどの明るいニュースもありました。検体数が減るという事は、少なからず時間ができるとも考えられ新しい技術や知識の習得に充てることもできるという事で、病理検査室では各職員に今まで担当していなかった業務の教育をしている最中で、コロナ禍が収まった折には部屋として成長した姿になっていたらいいなと、小さな希望を抱いています。

最後に多摩細胞診研究会の皆様の健康を祈りつつ、再開された研究会でお会いできる日を楽しみにしております。

## 2020年コロナ禍での臨床検査

東海大学医学部付属八王子病院　町田　知久

昨年の今頃（2020年1月頃）は、まだコロナウィルスが流行るかもしれない程度の状況で、現在のコロナ禍など全く想像もしていませんでした。3月以降は飲み屋も行けず、辛い日々が未だに続いております。私が勤務する東海大学八王子病院の病理部門は臨床検査技術科に所属し、他に検体検査室、生理検査室、内視鏡検査室の計4部門で構成されています。職員は54名が在籍し、各々の部門で日常業務の他、検体検査の夜勤・休日の日勤も対応しています。もちろん病理部門もこの日勤夜勤業務に参加しています。最近では私自身、病理以外の全ての検査部門に係っている関係上、検体検査が中心にはなりますが、当院の昨年1年間のコロナウィルス感染防止に対する活動を少しお話させて頂きます。

コロナ禍が本格化してきた3月、当院にもコロナ救急外来が始まり感染患者の入院も増加してきました。コロナ感染が拡大する中、患者の診療にあたる医師・看護師は戦々恐々とする未知の診療に対応を始めました。我々臨床検査技師もなにかやらなければいけない。では、臨床検査で何ができるか？何が望まれているか？を考えると、やはり第一にはコロナウィルス感染の検査体制構築。次はコロナ検査の検体採取でした。新型コロナウィルスの検査体制は、当初、外注で対応しましたが、院内感染防止の観点における体調不良職員の検査等、結果の緊急性が要求されはじめ、なんとかルーチンでPCR検査を行う事が出来ないか考えました。いきなり高度な操作を要するPCR検査を導入することは検査環境も含め難しいため、なにか比較的簡便に検査ができるものはないか情報を集めると、LAMP法がインフルエンザの抽出液が使用することで、比較的簡単に検査ができ一般の検体検査室で扱うことが可能ということが分かりました。感度は一般のPCRに比べ若干低いですが、後の検討においても感染能力を持つ患者には申し分なく、入院中、ウィルス量が下がった患者の検体を測定すると、その差は問題ない範囲であることが分かりました。病院に提案すると、PCR検査の要望が高いことから安全キャビネットも合わせ即購入が決まりました。しかしながら、この時期は機器の購入希望者が多く納期に2ヶ月以上かかりましたが、7月よりコロナ外来、職員発熱者を限定しLAMP法での新型コロナウィルスの遺伝子検査を開始しました。院内で検査が可能となると、治療の迅速化ばかりではなく、一般の発熱患者や職員の発熱者からのコロナ陽性患者拡大を防ぐことにもつながり、需要は拡大していきました。現在では、入院予定患者を含む全ての患者のコロナ感染症検査を院内のLAMP法で行っています。その中で、問題となったのが、夜勤や休日勤務時の検査依頼でした。LAMP法も遺伝子検査ですから、コンタミの防止が重要で安全キャビネット内の正しい清掃操作が重要となります。また、検査は



インフルエンザ抽出試薬を用いたいわゆる簡易法ではありますが、正確な操作と慣れが必要なため、病理や生理検査の担当者が検査するには少し荷が重い状況でした。

夜勤や休日の日勤時に適した方法はないかと、他の方法も含め検討した結果、Smart gene （ミズホメディー）というPCR検査機器を見つけました。この機器は1件ずつの検査となりますが、綿棒を絞った抽出液をカートリッジに滴下するだけの操作で、1時間で結果がでます。検討データも良好で、LAMP法より感度は高く、外注検査に引けを取らない機器でした。この機器の導入により、検体検査スタッフの負担が軽減されると共に病理・生理検査スタッフの新型コロナ遺伝子検査への夜間・休日の参加が可能となりました。現在は需要も高く、2台で運用し、3台目が来月納品される予定です。

次に検体採取についてお話します。患者が増加し始めた昨年4月頃、病院長の一般診療、特にがん患者の診療・治療の継続と手術室にコロナウィルスを入れるなという方針に沿って、手術予定患者の術前の2～3日にPCR検査を行う事になりました。今では当たり前ですが、その時期にしては割と早い決断でした。いざ始める段階で、では「誰が検体採取する？」という問題が生じました。陽性患者と同じPPEを着用し時間もかかるこの業務に看護師はコロナ外来もあることから対応できないと渋っていました。そこで、せっかく資格も得たし、臨床検査技術科で検体採取をやろうと手を上げました。病院執行部からは大変喜ばれましたが、当の臨床検査技術科では「この忙しいのに余計な仕事をもってきやがった」というような考えを持つ人が少なからず居り、最初の3ヶ月は2人一組で行う1人は自分が多く請負ました（笑）。しかし、数か月後、採取の時間を午後に移し、検体採取が自信をもってできるようになったころには多くの職員が参加するようになりました。 現在では入院予定患者全員に、PCR検査とその検体採取を行うようになり、昨年の病院に一番貢献した組織に与えられる病院長賞を臨床検査技術科で頂きました。病理のスタッフも当然この業務に加わり頑張っています。まだまだ、終わりは見えてきませんが、早く多摩細胞診研修会が開催され、皆さんと懇親会で乾杯をしたいものです。もう少しです。頑張りましょう！

## 【新型コロナウイルス感染症拡大から１年あまり・・・】

東京セントラルパソロジーラボラトリー
笹井　伸哉

多摩細胞診研究会の皆様

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の蔓延拡大により多くの学会、研修会等が中止や延期、Web開催となりお顔を合わせての討論や近況報告などが出来なくなって1年以上が経ちました。多摩細胞診研究会も同様に開催出来ずにありますが、皆様、お元気ですか？

職業柄、大変お忙しい日々をお過ごし事と思います。原稿を書いている今日は、東京都でコロナ特別措置法に基づく「蔓延防止等重点措置」を適用される前日です。私の住む立川市も対象地域に指定されました。１カ月間、自粛の生活？が続くことになります。さて、昨年の２月に、私、持病の治療中に１週間の発熱があり急遽、呼吸器内科受診となりました。胸部CT検査の結果、肺炎と診断されました。薬剤性間質性肺炎の可能性が高いが新型コロナに感染している可能性があるとの説明を受け、思わず医師に、新型コロナに感染していたらどうなります？と呼吸器内科の医師は一言、死ぬと思います。と・・・。でも今、自分は生きてる！薬剤性の肺炎だよね？と自分を納得させて飲んでいたお薬、注射を休止して１週間後、肺炎は改善していました。今考えるとその頃はこの感染症のことはまるで分っていなかったのだなと、最近は大分わかってきているのかな（？）ワクチン接種も医療従事者から始まりました。一般のワクチン接種が早く進むことを祈るばかりです。私は優先接種の対象年齢に入っています。変異株も出てきているので早めの接種をしたいけど、現状ではいつになるのかわかりません。多摩細胞診研究会のゴルフコンペも新型コロナの影響で２０１９年１２月を最後に参加者の方々の健康、安全を守る為、中止してきましたが、昨年１１月２９日（日）にさいたまゴルフクラブで１年ぶりに再開いたしました。久しぶり皆さんにお会いできてとても嬉しくおもいました。感染防止のため、表彰式や懇親会は行わずプレー終了後はなるべく早く帰宅して頂きました。今回は、賞品もなく、懇親会もなくちょっと寂しいコンペでしたが皆さんとお会いできたのが何よりでした。今回のコンペは、１８名の参加をいただきました。優勝は、貫井尚子さん、準優勝は本郷俊介さんでした。おめでとうございました。現在、次回のゴルフコンペ開催の準備を進めています。午前、ハーフコンペ（午前中のスコアで勝敗を決定）も視野に入れています。感染症対策を十二分に行い開催いたしますので、どうぞ、ご参加をよろしくお願いいたします。

追伸、

会報を担当してくださっている、若槻さんいつもありがとうございます。本会報発行で卒業ですね。三代目の編集長でしたが原稿を依頼や催促などご苦労も多かったと思います。お疲れ様さまでした。ありがとうございました。



## この1年を振り返って

がん研究会有明病院 臨床病理センター 細胞診断部　藤山　淳三

『多摩細胞診研究会の皆さま、お久しぶりです。如何お過ごしでしょうか？』と聞かざるを得ないほど長い間多くの皆さまとお会いしていませんね。2019年の年末に中国武漢で確認されたコロナウイルスが猛威を振るい、世界中を恐怖の渦に巻き込むことになろうなんて一体誰が想像したでしょうか。国内においては2020年4月7日に主要都市で緊急事態宣言が発令されて、まさかのロックダウン。平日通勤時間帯の電車内には数名しかいない日もありました。2020年開催するはずだった東京オリンピックが延期され、2021年の開催も今日現在定かではありません。そして経済が回らないことによる企業の業績悪化、従業員の賃金カットや解雇そして企業の倒産。幸いにして私たち医療従事者はコロナ禍でも、いつも通りとまではいかないまでも仕事をすることができておりました。そしてコロナ効果ともいうべきか、PCR検査や抗原検査で臨床検査技師という職業が注目を浴びたことも記憶に新しいですね。一方、ほぼ毎日出勤していたので、当然のことながら感染のリスクが高くなり、こんな状況ではいつ感染してもおかしくないなと半ば諦めモードで過ごしていた時期もありました。その当時は勤務先でコロナ感染第1号にだけはなりたくなかったというのが本音で、そのため最初の感染者が出た時は「とうとう出たか」という驚きと、「次は自分かな」という不安と、「自分が1号にならなくてよかった」という安堵感が入り交じっていました。おそらくこれに共感できる方も少なくないでしょう。

2021年3月から漸くワクチン接種が始まろうとしています。これを機にコロナが沈静化し、ある程度もとの生活に戻れることを期待したいし、今は何より、この多摩細胞診研究会の仲間とワイワイと楽しくお酒を酌み交わし、楽しく語り合い、楽しく唄いたいことが私の一番の望みです。　みなさん、あと少しの辛抱です！！！

## 写真　細胞の(^_-)-☆

## 新型コロナウイルス感染蔓延に対する臨床検査技師教育現場の対応

廣井禎之　新渡戸文化短期大 臨床検査学科 学科長
（現 順天堂大学 新学部開設準備室）

2021年新型コロナウイルスの感染拡大、そして緊急事態宣言により学生の通学が大きく制限されました。また、学生臨地実習先病院の新型コロナウイルス患者受け入れに伴う方針変更､等のため、学生実習の中止や中断が相次ぎました。学校としての自粛も含めて全ての学生が自宅学修となりました。
新1年生においては、入学式が中止になり、一度も学校に来ないまま緊急事態宣言下となりました。
私たちは学生教育を維持すべく教職員が力を合わせ対応しました。その概略を説明させて頂きます。

まず、臨地実習の中断、中止に対する対応です。最終学年の学生はある程度仕上がっていることより、自分で学習計画を立て、毎日どのようなことを勉強したのかを臨地実習ノートに記載しておくこととしました。これは作業日誌を記録する習慣の確立にも寄与すると考えました。この自宅学習は5月末日まで続きました。新1、2年生へは、とりあえずの手段として通信教育を行いました。具体的には授業のレジュメと課題を郵送しての自宅学習と添削です。これには非常勤講師も皆快諾し協力をしてくれました。

これである程度の期間が稼げましたので、その間に遠隔授業を実施するための準備を行いました。特に1年生の自宅インターネット環境は様々でした。教員（非常勤講師含む）の遠隔授業対応も平行して行いました。緊急事態宣言による自宅勤務のため、教職員同士のコミュニケーションにも気を配りました。

5月6日に緊急事態宣言が解除されず延長されました。このため、全学年に対し通信教育を基本として、Zoom等による遠隔授業、動画配信を加えました。
5月21日、緊急事態宣言が解除されたことにより、6月1日より通常の教育）（臨地実習含む）を目指しましたが、そう簡単には行きませんでした。臨地実習は再開してくれた病院が多数でしたが、実習期間はまちまちとなりました。中止となった病院に配置されていた学生は他の病院に振り分けました。学生の追加受け入れをして下された病院に感謝申し上げます、ありがとうございました。

1､2学年学生の学内実習はソーシャルディスタンスを考慮して2階と3階に分けて行いました。学内における学生の密を避けるため、可能な限り遠隔授業を取り入れ、各学年週何回かを自宅で受講としました。

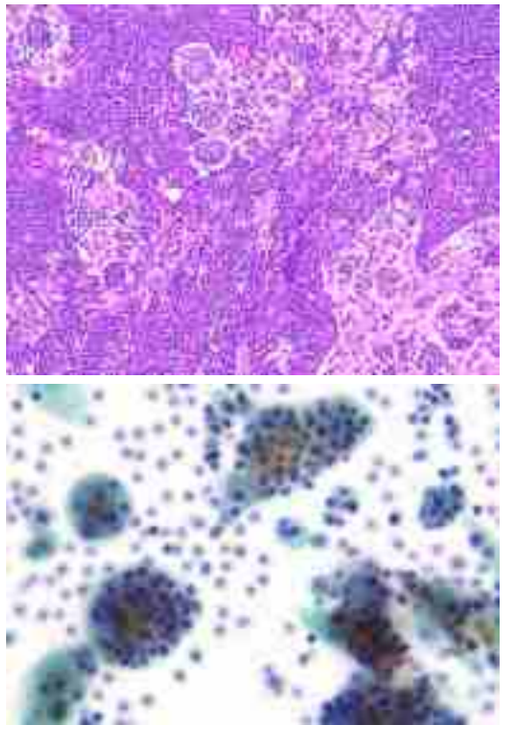
対面の場合においても、教室を2つに分け、ひとつの教室には教員がいて他の教室はズームによる動画配信としました。この割り振り、授業スケジュールの変更、休憩時間をずらすために各学年の授業時間変更、そして遠隔授業の実際にはいくつも問題が出てきましたが、ひとつひとつに対応しました。加えて、本人のみならず保護者の理解も必要で、詳しく説明して理解をしてもらいました。学生生活においては、毎日の検温、食事場所の指定、外食等日々の生活に対する制限にも特に混乱はありませんでした。エッセンシャルワーカーになる自覚の為と解釈しています。

今回のコロナ対応を通して感じたことは、学生教育（臨地実習含む）はいろいろな先生の理解・協力・ご厚情により成り立っていることを改めて認識しました。この場を借りて全ての先生に言わせて頂きます、ありがとうございます。そして、学生の自覚が大切であること、特に遠隔授業は勉強する学生とそうでない学生の差が明らかについてしまいました。これはこれからの課題と考えます。

2020年度は新型コロナウイルス感染蔓延によりイレギュラーな教育を行った年となりましたが、今年度卒業生の国家試験合格率は95％を超えることが出来ました。遠隔授業は現在も併用しており、教育の幅が広くなりました。学生教育は学校の教員だけで行うことは出来ません。今後とも臨床検査技師課程の学生の教育をよろしくお願い申し上げます。

### 東京病院WEB勉強会の様子

2021/8/13



Rosai-dorfman病

## 2020年を振り返って　　我妻　美由紀

昨年の今頃（1月）は第50回多摩細胞診研究会を帝京大学医学部付属溝口病院で3月14日に開催すべく、プログラムを作成して頂いたり、発表の先生方に連絡したり、事務局は普通に動いておりました。クイーンエリザベス号でのCOVID-19の蔓延と、日本国内でもチラチラ感染者が出てきた2月中旬、私は学会参加のためにスイス（ミラノ近郊）へ若干後ろめたい思いで向かいました。ミラノへ到着した日に、イタリアでは感染が急拡大したとのことで、観光施設が急遽閉鎖され、世界中感染情報一色となりました。幸いスイスには感染者がまだいなかったので、私達以外マスクをしている人もほとんどいない状態でした。滞在中も刻々と深刻化する世界の状況に、弱いWi-Fiに苦戦しながら夜中に多摩細胞診の幹事の皆さんと連絡を取り、研究会の中止を決めました。スイスから中止メールをせっせと会員の皆様に送ったことが一番の思い出で、それも遠い昔のことのようです。

東京オリンピックで都内は混雑するであろうということで第51回多摩細胞診は、例年より時期をずらし、12月12日に公立阿伎留医療センターでの開催を予定しておりました。しかしオリンピックどころかコロナの完全な抑え込みが出来ないままに、ウイルスの活発化する冬に突入しそうであったことから、早々に中止を決めました。2020年は残念ながら、多摩細胞診研究会を1回も開催しなかった年となってしまいました。

ある程度予想はされていましたが、2021年に入り東京都だけで1日2000人を超える新規感染者数という日もありました。コロナの長期化で確実に医療現場は疲弊し、対応能力を超えるものになっていることを実感しています。当院でもLAMP検査を1日に4回行い、検査担当者も各部門から出して行っている状態で、実は私も担当しています。

現在、世界史に残るパンデミックの真っただ中にあって、安心安全であると信じられてきた日本の医療体制は脆弱でした。今後医療システム自体も変化を求められると思われます。その時に『臨床検査技師』は、AIに移行する可能性の高い業種というマイナーイメージから脱却して、『様々な検査手技や診断技術を持ち合わせた技能集団』として重要な存在であると、アピールしていくチャンスではないかな…と密かに思っております。

チャンスと言えば、長年続けております東京病院細胞診勉強会ですが、2020年2月14日開催を最後に休止しておりましたがWEBで再開し、なんと近年で一番参加者が多くなってきているのです！！これは予想外のチャンスが到来しました。

肩肘張らずに顕微鏡をみんなで覗いて細胞について意見を言い合う…という持ち味がなくなるのはなぁと、なかなかWEBで開催する決断ができませんでした。



しかしWEBで10月に試しに行ってみたところ、鏡検は出来ませんが写真を多めにしてプレゼンを行い、画面越しではありますが、参加した皆さんに細胞所見を言って頂くという、いつものスタイルで行うことが出来ました。久々の勉強会だった為か大変盛り上がり、皆さんの高揚感も感じました。それ以降は忘年会、新年会もないから勉強しよう！と例年になく毎月行っています。

今では新たに参加してくださる方が増えたり、地方にいる方でも参加出来たり、職場だけでなく帰宅してからお酒をお供に…など色々なスタイルで参加出来るというWEBならではの良さを感じています。

今まで東京病院の勉強会に参加してみたいけど、遠いし、遅くなるから参加しなかったという方、開始時間に間に合わないという方もWEBだと途中からでも、急に参加出来なくなっても大丈夫。PCがなくてもスマホでも参加できます。

だいたい第2金曜日18時30分から20時で終わります。久しぶりに皆さんの顔も見られますし、思っているより楽しいですよ！興味のある方はどなたでも大歓迎
wagatsuma.miyuki.pm@mail.hosp.go.jp
までお知らせください。
毎回開催前に参加者を募り、招待メールを送らせていただいておりますので、お気軽にお問い合わせください。

最後に多摩細胞診研究会で発表を予定してくださっていた講師の先生方、症例提示予定の方々、時間をかけてご準備いただきましたのに会が中止となり大変ご迷惑をおかけ致しました。研究会を再開した暁には、是非とも御講演頂けますよう、今後ともよろしくお願いいたします。皆様と以前のように集まって多摩細胞診研究会を開催できる日が訪れることを、切に願っております。

## 東京病院WEB勉強会の様子

2021/2/19

2020/11/13

## COVID-19の影響･･･

国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院　澁木康雄

2020年1月の下旬、大阪で開催された細胞検査士会ワークショップでの帰り、新幹線内に流れる電光掲示板のニュースを目にして酒を飲みながら、「また中国で何か流行りだしたね～」と言いつつ、何年か前のSARSのように日本では大事に至らず終息するのだろうと思っておりました。ところが、その後「国内何人目！」や「クラスター発生！！」などが日常的に聞かれるようになり、子供たちはオンライン授業、妻もリモートでの在宅勤務となって、4月7日には遂に緊急事態宣言が発令されました。その後、当院でも他の病院同様に東京都からの要請でコロナ専用病棟が設置され、内視鏡検査や手術等の実施に影響がでましたが、病理検査室においては、以前より過固定防止や検査報告時間短縮の目的で土日祝祭日のシフト勤務を実施していたことから接触回数の削減や密を防げたことは不幸中の幸いでした。

感染拡大の影響で大きく変わったことの一つに会議や研修会等の開催方式があります。会議はWEBが中心となり、ZoomやTeams、Skyp、Webex、Blue jeans等々・・・パソコンやタブレットに多数のアプリがインストールされていきました。移動時間や会議費がかからず便利な反面、「この委員会ってこんなに頻繁に会議開催していた？」と思うほど会議が多くなり、感染拡大前よりもGoogleカレンダーの中身は密になったように思います。また、以前は会議や研修会の後は「軽く一杯」が常でしたが、それもなくなりストレスは溜まり続けました（現在も溜まり続けています・・・）。その影響から家でのお酒の消費が大幅に増加しました。帰宅後、手洗いを済ませた後は冷蔵庫に直行し、冷えた麦酒で体内のアルコール消毒を実施、その後お風呂で体外洗浄を済ませた後は、念のためもう一度冷蔵庫から体内用消毒液（？）を取り出す。そして、もう少しアルコール度数の高いほうが、効果があるのではないか？と芋焼酎をロックで・・・こうなると眠気が襲ってくるまではエンドレスです。以前とは比べものにならないくらいお酒の減りが早くなった一方、購入額は激増し、体重、腹囲も増加するという結果に、妻からは叱責され、子供たちには呆れられるという負のスパイラルに陥っております。また、学会や研修会もWEBやハイブリット開催が主となり、聴講する立場としては、都合の良い時間に何度でも視聴でき、なんて便利なのだろうと思う反面、座長や演者側としては、スライドの誤植や言い間違い、噛んでしまった部分、更には笑いを取りにいって見事にすべった場面等が、ある一定期間配信され続けるという黒歴史も体験させていただきました・・・。佐藤之俊先生が大会長を務められた第61回日本臨床細胞学会総会春期大会でも、期間中に急遽企画された参加交流型テーマセッションに参加させていただきましたが、LINEで「観たよ～」と来るたびに「ありがとう」と返信しつつ、心の中では「やめて～！！」と叫び続けておりました。今後、精進を積まねばと猛省しております。

とにかく一日も早く感染が終息し、多摩細胞診研究会が従来の担当施設による現地開催となり、盛大な懇親会ができる日が来ることを心待ちにしております。



## コロナ禍の2020年

立川相互病院 病理診断科 布村眞季

数年後にふりかえる時、この一年は辛い思い出となるのか、よい経験となるのか。

地球規模のパンデミックだということを実感し始めた3月頃、私は相当な悲壮感を抱いていた。テレビニュースで次々と瀕死の患者が運ばれてくるニューヨークの映像を見て、来月には東京もこんな風になるんだろう、と漠然とした恐怖を感じていた。ようやく軌道に乗り始めた連れ合いの飲食店も借金を背負ったまま閉店となり、家に失業者を抱えて死体だらけの病院で防護服に身を包んで働きつづける、悲惨な想像にげんなりしていたのは4月頃だったろうか。世間では受診控えが起こり病理の検体が減少してきたのをよいことに有休をとり、連れ合いの店のために（共同経営なので名義上は私にも義務はあるのだが）各種支援金や融資の手続きで、市役所やら税務署やら銀行やらに何度も足を運んだ。［男ってこういう手続きがどうも苦手なんですよね…。おっと失礼、こんなボヤキで会長を辞任するわけにもいかないので撤回します。手続きが苦手なことと性別に関係は一切ありませんよね！(キッパリ)］

どうにか閉店せずにやっていくめどが立ってきたのは6月ごろで、感染拡大も小康状態であった。夏と秋には酒場に人が戻ってきて、冬には再度閉店しているが、4月のような悲壮感はない。感染が落ち着いたらまた再開、ひどくなったらしばらく閉店、この繰り返しがマスク生活とともに数年続くのだろう。一年たって心構えが随分とのんびりしてきたというのが正直なところである。

もちろんこれは個人的な運によるところが大きい。covid感染もしくはコロナ禍のあおりで人生が変わってしまった人も少なくないからだ。立川の飲食店も閉店や休業が相次いでいるし、重症だった患者は回復後も在宅酸素療法を余儀なくされていると聞く。重篤化しにくいとはいえ、成長期の貴重な時間を制限だらけで過ごしている子どもや、社会にはばたくチャンスを奪われる若者には、疾患に劣らぬ後遺症をもたらしているに違いない。［因みに、成長の伸びしろがほとんどない50代で月給取りの私は、旅行（所属団体の世界大会がケニア開催なのでサファリに行く予定だったのに、もちろん中止）とか野球観戦、日々の飲み会を諦めた程度で、コロナ禍が人生にとっての大事件となるかどうかは今のところ不明。］

マスクなんか配るより自前のワクチン開発に予算使えよ、とか、参加国が少なくても無観客でもオリンピックやるならweb開催でええやろ、とかいろいろ文句を言いながらも、剖検があればやっぱり初めての疾患なのでうずうずするし、先週はcovid陽性の胎盤が出てきて大喜びの藤林先生をみてこちらまで嬉しくなってくる。病理医とはやっぱり変な生き物なんだろうと思う。

## コロナ禍の2020年

旭中央病院　蛇澤　晶

多摩細胞診研究会のみなさん、ご無沙汰しています。一昨年の4月に千葉県の旭中央病院に移籍したあと、研究会や新年会をサボってしまった罰が当たったのか、Covid-19 virus感染禍（コロナ禍）で皆さんに長い間お会いできずにいて、とても残念に思っています。

旭中央病院は1000床を有する東房総の基幹病院ですし、他の医療圏の病院がパンクしたこともあって、Covid-19 virusに感染した患者さんの入院数はズーっと10名以上でした。昨年の緊急事態宣言時あたりでは一般の患者さんも激減したため、病理科でも昨年の剖検は74例（一昨年は94例）、組織診 11178件（同 12242件）、細胞診12638件（同13603件）と各件数が減少しました。今年になってからは患者さんの数は回復傾向にあり、最近は病院看護部から「ベッドが足りないので、延期できる患者さんは明日入院にしてください」という院内メールが廻ってきています。スタッフの苦労が偲ばれます。ちなみにCovid-19 virus感染症の剖検は1例ありましたが、私の不手際で入ることができませんでした（標本はシッカリ見せてもらいましたが）。

コロナ禍のなかで私たちに関連した変化の一つとして、学会の形態が挙げられるのではないでしょうか。軒並みＷＥＢ開催もしくはＷＥＢ・会場hybrid開催になりっています。当然、学会を運営する方のご苦労は大変です。日本臨床細胞学会の会長をなさった佐藤先生の場合は、準備途中で開催形態を変更され、そのお手数はなおさら並大抵のものではなかったと思われます。この場を借りて、その労に深く感謝申し上げます。

当然、学会での発表形態も変わり、powerpoint で初めてスライドショウの録画をなさった方も多かったのではないでしょうか。私も同様でして、聴衆が前にいないんだから気楽にできるだろうと高を括って始めたのですが、大間違いでした。画像を並べるのは今までと同じ手順なので苦労はそれほどでありませんでしたが、そのあとが難題でした。理由の第一はi）私の性格から言って、一人でコンピュータに向かってぶつぶつ話すことが非常に寂しく感じたことでした。ほかにも、ii）通常であったら聴衆の反応を感じながら、「このスライドは受けてないから早めに引っ込めよう」とか「少しは関心を持ってもらったから、ここでは少し声を大きめに」とか、細工をしながら話ができます（善し悪しは別として）が、今回のような場合には抑揚のない無愛想な話し方になってしまいがちです。さらに（これが一番の難点ですが）iii）口演では短い時間でスライドが変わるので、論旨に多少の矛盾点があっても聴衆は気づかないことが多いのですが、WEBだとスライドを戻って見る・聞くことができるので不備を確認されてしまう可能性が



高く、ファイルの校正時に厳重にチェックしなければならず時間がかかる，などが挙がります。最後の問題iii)はどうしようもないのでしょうが、i)やii)への良い対処法を御存知の方はいらっしゃらないでしょうか。教えていただければ助かります。

Covid-19感染が治まる、もしくは感染への対応が確立されるまで、もう少し時間がかかりそうです。多摩細胞診研究会の活動も制約されていますが、そのなかでも細胞診の勉強会をWEB形式で開いてくださっている方々がいらっしゃいます（たとえば、東京病院の我妻さん主催の勉強会）。ほかにも同様の会を開いていらっしゃる方がおられるのではないでしょうか。私も参加させていただいており、皆さんの努力にお礼を申し上げたく思います。

個人的な制約も続いています。私自身は出不精なので、週末に旭から東京病院に出向き仕事をさせてもらっているだけで相当な気晴らしになっていますが、アウトドア派の方には辛い期間になっているのではないでしょうか。でも、もう少しだと思います。皆さん、健康第一にお過ごしください。そして勉強会や懇親会が開かれたら、またみんなで大騒ぎしましょう。

## 多摩細胞診はじまりの物語

**東**京病院に、癌研の養成所を卒業したての細胞検査士上野君がいました。そして、上野君は毎日毎日一人で細胞診を見ていました。でも、上野君はいつも不安。この細胞は癌でいいのかなぁ？

**そ**んな時、風のうわさで近くに細胞検査士の田中君がいることを聞きつけました。

ある時、上野君は田中君に電話してみました。

“一緒に勉強しませんか”って。

そうしたら、田中君も一緒に悩める仲間が欲しかったことがわかりました。

**そ**うして、最初の勉強会が1982年（昭和57年）8月に東京病院の薄暗い部屋で開催されました。

**この経緯については会報No.1に小松彦太郎先生が寄稿されています。**

# 多摩細胞診研究会の歴史

1982年（昭和57年）8月東京病院勉強会はじまる
1986年（昭和61年）上野さんPCLに移動
1991年（平成3年）　昭和病院勉強会開始
1991年（平成3年）6月8日　　第一回東京病院と昭和病院合同勉強会開催
1991年（平成3年） 10月26日　第二回合同勉強会（第100回東京病院勉強会）
1993年（平成5年）10月　**多摩地区細胞診研究会**発足
1994年（平成6年）1月29日　第一回**多摩地区細胞診研究会**
1996年3月会報第一号発行
1999年（平成11年）1月1日会則の制定
1999年（平成11年）事務局を東京病院に設置
1999年11月名称を現在の**多摩細胞診研究会**に変更
2000年（平成12年）ホームページ開設
2006年（平成18年）会報に細胞の画像をカラー印刷
2019年（平成31年）3月25周年記念祝賀会

**多摩**細胞診研究会は若き日の上野喜三郎さんの細胞診に対する思いから始まり、多くの仲間が集まって現在に至ります。

**東京**病院勉強会は昭和病院との合同勉強会や多摩地区細胞診研究会を経て現在の多摩細胞診研究会となりました。

**その**思いは、細胞を通じて考え、語り合い、分かり合う仲間が集まる場の心地よい雰囲気を作っています。

**そん**な多摩細胞診研究会の歴史や秘密は、ホームページにいっぱい詰まっています。仲間たちの名言やエピソードの紹介をさせていただきます。

**今**後この研究会がどのような運命をたどるのか非常に興味をもっている。それぞれの施設を中心にした勉強会とは違った何かをみんなが期待している。それは仲間の輪であり刺激であろう。

小松　彦太郎

……設立当初に比べて隔世の感がある。ただ、一つ希望を言わせて頂ければ、この勉強会が形式的な研究会にならず、家庭的で暖かみのある研究会として発展されることを希望して止まない。

上野　喜三郎



**今**こうやって細胞を飲むようにお付き合いして頂けるのも、細胞診にたいする思いが共通しているからだと思います。
その色の鮮烈さと、生命にたいする思いは、かつてのパパニコロウも同じ思いで細胞に接していたものでありましょう。

大村　剛

**こ**の勉強会を通し、多くの人と知り合い、仲間も増えました。細胞診を学ぶだけでなく、細胞診を通じて、多くの人との出会いがあり、親しい仲間が増えることは喜ばしいことです。

今後更に、多摩地区研究会を通じた多くの仲間が増えることを期待して、研究会に参加していただきたいものです。

田中　健次

**たま**
猫の名前ではありません

上野さんのスランプの話
会報No.1

上野駅で森さんと上野さんが電車に乗り遅れそうになる話
会報No.24

田中さんと上野さんの出会い
会報No.1

小松先生と上野さんの出会い
会報No.1

**細**胞所見の捉え方が各人で異なるのは当然のことです。若い人は間違いを恐れずドシドシ発言し、また、司会者は若い人達を指名してもらいたいと思います。……
ベテランも昔は若い初心者だったのです。そして、彼らは優しいのです。
いくらでも教えてくれます。若い人たちの一層の奮起を希望します。

蛇澤　晶

**こ**こまで書いてみて、もしかして私、結構張り切っているのかも、という気がしてきました。…が、皆さんにエネルギーと刺激をもらいながら楽しくやっていけるような予感がします。
老若男女問わず発言しやすい雰囲気と「よく学びよく遊べ」というモットー、この伝統を受け継いで次の世代にバトンを渡すまで、よろしくお願いします。

布村　眞季

よく学び，よく遊び，よく飲む

Society of cytopathology

# TAMA

Est. 1994

## 編集後記

みなさま、コロナ禍の2020年の企画はいかがだったでしょうか？
それぞれの場所でみんな頑張ってるなぁと、思わず応援したくなったのではないでしょうか。原稿を寄稿してくださった先生方、本当にありがとうございました。今回の企画で私の会報編集は最後となります。誤字脱字やら不手際があったりと、ご迷惑をかける事も多かったと思いますが、寛大な心でお許しください。

編集に携わる中で感じたことは、会報の発行を続けていることの意味でしょうか。
多くの方々が心寄せたこの会の“つなぎ手”の一人になれたのであれば幸いです。

**多摩細胞診研究会事務局**
**独立行政法人病院機構東京病院**
**臨床検査科　病理検査室**
〒204-8585　東京都清瀬市竹丘3-1-1
電話　042-491-2111

**編集責任者　：　若槻　よしえ**
**（東京医科大学八王子医療センター）**

**発行責任者　：　布村　眞季**
**（　立川相互病院　）**

No.26　Oct,　2021